

復興を歩む

vol.41

ラオスとの交流

村立学校エリアに到着し、飯館中学校の生徒らの歓迎を受ける視察団。前列中央右側がラチャンタブーン委員長。同左側がエスコートする和田節子校長。視察団の一行はランチルームで給食を食べ小中学生と交流。認定こども園でも園児と触れ合いやさしい笑顔を見せていました。

8月30日、東南アジアのラオスから、同国のオリンピック委員会が来村し、スポーツ公園や宿泊体験館「きこり」などを視察。センドゥアン・ラチャンタブーン委員長が、村を2020年東京オリンピック・パラリンピックの事前合宿地の一つにしたいと意向を表明しました。

ラオスと村との交流は、震災前から続いています。村は、子ども達が世界に目を向けるきっかけにしようと「ラオスに学校を贈ろう」までいプロジェクトに取り組んでいました。始まりは、平成21年の小中学校での出前講座で、「アジア教育友好協会」理事で建築家の佐川旭さん（現在はまだ大使も委嘱）に、ラオスの教育環境について話してもらいました。

そこで、自分達が当たり前のように感じていた学習環境がとても恵まれたものであると気づいた子ども達。「ラオスに学校を贈ろう」と、全国にふるさと納税を通じた寄付を呼びかけ、募金活動も始めました。週1回弁当を持参する「弁当の日」運動も行い、その分の給食費で、学校近くに井戸も掘ることになりました。

支援先となったドンニヤイ村も、家族や地域が助け合って暮らす「まदीい」な村。雨季にはぬかるむ土間の教室で、子ども達が瞳を輝かせて学

んでいました。同年11月には、それまでに集まった支援金を元に、現地で建設工事がスタート。23年2月には、飯館中生が英訳した絵本が、ドンニヤイ村に届けられました。「子ども達がラオスを通して世界を学び、自分自身を見つめ直すことができる」。手応えをもって活動が進む中で、あの震災が起きました。

ドンニヤイ村の人々は、飯館村のために祈り、できる限り力になろうとお金を出し合いました。お金を出せない人は米を、米も出せない人はニワトリをお金に替えたそうです。ドンニヤイ村からの義援金は励ましの言葉と共に人づてに村に届きました。

そして、ドンニヤイ中学校の新校舎は、平成24年に完成しました。震災後の混乱が続く中、村も何とか約束を果たすことができました。さらに4年後の28年には、ドンニヤイ中学校の卒業生代表が来村。飯館中生らと感謝を伝え合い交流しました。

そして今年、村は、東日本大震災の被災自治体が支援を受けた国々と交流する「復興『ありがとう』ホストタウン」に登録されました。今後さらに詳細を協議し、議会の承認を経て受け入れが決定すれば、来年度からは、事前合宿の受け入れについても本格的な準備が始まります。

飯館村とラオス・ドンニヤイ村 交流の軌跡

- 平成21年9月 小学校での出前講座
「ラオスに学校を贈ろう」までいプロジェクトをスタート
- 平成22年2月 教育長らが現地を視察
- 平成22年11月 中学校建設支援金を贈呈（第1回）
ドンニヤイ中学校 建設着工
- 平成23年2月 英訳した絵本を現地に届ける
- 平成23年3月 東日本大震災
ドンニヤイ村から寄付やメッセージが届く
- 平成24年2月 ドンニヤイ中学校竣工
開校式が行われる
- ドンニヤイ村の村人達が飯館村のために祈る
- 平成24年以降 ドンニヤイ中学校が地域の基幹校に
- 平成28年10月 ドンニヤイ中学校の卒業生代表が来村
- 平成29年11月 復興「ありがとう」ホストタウンに登録
- 平成30年8月 ラオス・オリンピック委員会が来村